



2005年11月15日 発行

2005年秋号

<第6号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 E-mail: union@h9.dion.ne.jp

## 『家族と私』

私の家族は、四人家族です。弟がいます。

一番親の事でびつくりしたのは、私と親と三人で過ごしている時に、別に何も変わった事はないのに、気持ちがいらいらしてきた事です。

それってどうして自分は不安になってきたのが、その時は分かりませんでした。

月日がたつにつれて、それがだんだんとひどくなつて家を出たくなくなりました。

やっと家から出てからの自分は、本当の自分よりももう一つの自分をえがいている感じでした。

一日帰ってこない日があつて、親も弟もものすごく心配で、びくびくして家に戻って来ました。でも、本当にすごく心配してくれました。

自分の障害は、気分的なところからきているので、他の人と比べたら、自分の方がすごく気持ちの方の障害が強いと思いました。

「気分的に」という事を少なくしていける生き方をして、親とも、弟の家族の方とも一緒に明るくいきたいと思います。

(ふじい えみこ)

## グループホーム

### <メゾン>は今

#### 地域で暮らす

「グループホーム、ユニオンI・III・IV・VI」（通称メゾン）は、二〇〇一年四月一日に、大正区三軒家西二丁目の「メゾンサンロイヤル」という五階建てのマンションの中に、ワークスユニオンの事務局と共に開所しました。

現在の利用者は、男十名、女六名の計十六名（平均年齢二十九才）。生活担当職員四名と、全職員で宿直業務を交代で担っています。もう一つのグループホーム「アスク」は、次号で紹介します。

JR大正駅を降りると目の前には、居酒屋・本屋・コンビニエンスストア・病院・パチンコ屋などが立ち並んでいます。その大正駅から徒歩二分のとても便利な所に、五階建ての茶色のマンションがあります。このマンションの中に、十六名が暮らす四軒のグループホームメゾンがあります。

もちろん、ここは、彼ら他に、家族で生活している方、夫婦で暮らしている方、一人暮らしの方などがある普通のマンションです。

そのマンションの五階には、職員の事務所とみんなが集う食堂があり、五階・

四階・三階・二階の二LDKの住宅に、それぞれ二人で暮らしています。職員は五階にいて、二四時間三六五日いつでも誰かが彼らを見守っています。

「十六名が一緒のマンションで暮らしているの？それって、施設じゃないの？」と言う声もあります。いえいえ、それは形だけの事で、彼らは地域の中で、普通の住人として暮らしているのです。

ある日のこと、このグループホームに住む会話の苦手なYさんが、一軒の居酒屋で無実の罪を着せられた

事件がありました。

Yさんが「財布が無くなった、探す」と、すごい勢いで職員に訴えかけて来ました。職員が「どうしたの、財布なくしたの」と聞くと、彼は、ただ「探す」と言うだけでした。職員が「一緒に探そうか、どこや」と言ううと、彼は、職員の手を強く引つ張り、大正駅近くの居酒屋が立ち並ぶ場所に連れていきました。

職員が「居酒屋でなくしたの、どこの居酒屋」と聞くと、「〇〇料理屋」と。「〇〇料理屋やな。よし」と一緒に探すのですが見つかりません。何軒か廻るうちに、一軒の居酒屋の店長が「どないしたんや、この子さつきも来たで」と。そうです。彼は、職員に助けを求める前に、必死になつて、独りで財布を探していたのです。

そして、ある居酒屋の前に行くと、突然、Yさんの表情が変わりました。入ってみると居酒屋の店長が、

「さつきはゴメンな、財布落ちてたわ」と。なんのことうやら分からず、その居酒屋の店長に話を聞くと、「ここで、その子が食事をして、お金を払わずに帰ろうとしたんで注意したんや。しかし、いつも来るんで今回は大目に見て帰ってもうたんやけど、後で、その子が座つてた所を見てみると、財布があつたんや、ホンマごめん」ということでした。



ことを証明できて、ホッとした様子でした。

彼らは、紛れもなく地域でいろんな経験をして、生活しているのです。ある時は居酒屋で、ある時は階下の人からうるさいと苦情を受け、ある時は本屋から本のビニールを破いたと苦情の電話がきます。彼らは、いっぱい失敗します。失敗していろいろと経験していきます。その失敗も繰り返して、繰り返しの行われる場合もあります。でも、私たちはいつでも、そんな彼らを見守っています。何かあつた時に、彼らが助けを求めて来た時に、一緒に必死になつて探したり、あやまつたり、考えたりします。

財布が見つかり、無実の罪を晴らせたと確認した彼は、「財布あつたな、財布あつたな」と自分が悪くない

彼らがいろんな失敗をする度に感じます。だめなこととはだめな事として、地域の人は、彼らのする行動の良し悪しをしつかりと見ていてくれていると。みんな、地域の人に支えられながらこの大正の街で暮らしているのだと。

(松川)

# 生活力失い、生計の収入も大幅に減りました。

## 彼らの地域生活の実際

昨今の為政者たちは、社会的な弱者にあまり金を掛けたくないばかりに、これまでに無く熱心に彼らに企業就職を勧めています。いっぽう彼ら自身も、それとは異なる意図で、企業に就職したいと願っています。しかし、生活の実際は、思うに任せるほど楽なものではありません。

**余儀なく、障害のゆえに、** そのような、社会との適応

社会で伍して働くほどの力  
 を持たない者が、それでも尚  
 社会で人並みに生きていく  
 ために、どれほどの血と汗と  
 涙の努力を強いられるのか、  
 為政者たちは分かっている  
 のでしょうか。彼らのつまし  
 いギリギリの生活の実際を、  
 この号でご紹介する私ども  
 のグループホーム生活者の  
 例から、お伝えしましょう。

それでは――。  
 十数年間にわたって、無選  
 刻無欠勤を続けていた彼が、  
 なぜ急にかたくなに出社を  
 拒むようになったのか、その  
 余りの唐突さと意外さに、私  
 たちは頭を抱えました。

生活力を失い、生計の収入も大幅に減りました。

私どものグループホーム

に暮らす二十四名の人々の  
 生計は、月額約八万三千元  
 (一級)と六万六千円(二級)  
 の障害基礎年金に、それぞれ  
 支えられていると言っても  
 過言ではないでしょう。因み  
 に、一級年金取得者は六名、  
 二級者は十七名、無年金者が  
 一名です。

それに加わる自前の収入  
 は、働いて得た工賃(給料)  
 だけですが、先の号でお伝え  
 したように、平均して月額で  
 二万円少々に過ぎません。  
 企業に就職する人たちが  
 七名おりますが、年金と併せ  
 て曲りなりにも自活できる  
 程度の給料(月平均八万円)  
 を稼ぐ人は四名だけです。

グループホームの生活者  
 は、自分にかかる費用のいっ  
 さいを、自分で賄わなければ  
 なりません。国からの補助金  
 は、生活者個人にはなく、  
 支援する者の給与や費用に  
 当てられます。

せめて住居にかかる費用  
 だけでも補助が得られれば、  
 彼らの生活はずいぶん楽に  
 なるでしょう。或いは、障害  
 年金が、生活状況を考慮した  
 地域ごとの物価スライド制  
 であれば、様子は少し変わっ  
 てくるかもしれません。  
 ここ大正区界限は大阪市  
 内でも比較的安価な地域で  
 すが、それでも管理費を合わ  
 せた家賃は、一人平均月四万  
 五千円で、これに光熱水費等  
 を加えれば、住居費は五万円  
 近くになり、これで収入の約  
 半分が消えるのです。  
 食費は、大勢で賄われるた  
 めに、三食で月一人平均三万  
 六千円ほどで済みます。但し  
 これは給食の場合で、好きな  
 ものを食べに出れば、費用は  
 大きくかさみます。  
 生活雑貨類は一人五千元  
 を超えないでしょう。

月に最低十一万円の収入  
 が無ければ、ここのグループ  
 ホームでは暮らせないと、私  
 たちは試算しています。更に  
 衣服にかかる費用や、個々の  
 好みに合った趣味や余暇の  
 楽しみを加えれば、「健康で  
 文化的な暮らし」のために、  
 十四万円は必要でしょう。

この規準に見合って、いま  
 どうか自分の収入や蓄え  
 だけで生活できる人は、五名  
 にとどまります。  
 他の十五名は、親兄弟等の  
 家族から幾ばくかの援助を  
 受けなければなりません。  
 また、身寄り頼りを失った  
 者を含めて、四名がやむなく  
 住宅扶助・医療扶助等の生活  
 保護費を部分的に受給して  
 います。

為政者たちは、収入の及ば  
 ない障害者は地域に暮らせ  
 ないと考えているようです。  
 しかし、間違わないでいただ  
 きたい、彼らが施設ではなく  
 地域で暮らしたいと願うの  
 は、それが至極当り前のこと  
 だからなのです。(山川)

無視できないのは、医療費  
 です。体の弱い彼らのほとん  
 どが、何等かの病を抱えてい  
 ます。それも一つではない。  
 その治療にかかる費用や交  
 通費で、彼らの余分のお金は  
 すっかり失われます。

### 彼女との二人旅

今年からグループホーム旅行は団体ではなく、それぞれの要望が叶えられる個人旅行に変えられました。今まで旅行に参加した事のなかったAさんは、個人旅行ならと参加を決意し、自分で北陸3日間の旅を企画しました。

「彼女が何故旅行に行く気になったのか？」

彼女はてんかん発作を持っていて、日々の入浴も職員の見守りが必要です。「発作があったらどうしよう？」という不安があるため、大勢の旅行は避けていたのですが、職員との二人旅ならと行く気になりました。

彼女の一番の楽しみは温泉で、母親の心配をよそに温泉話で盛り上がっていました。母親は、旅行に行っても温泉に入るなんてもつてのほかと、職員に何度も電話をかけてきて、「お風呂はくれぐれも…いつもと一緒に見守りを…」と念を押されます。

そんな彼女と母親の間で

私は悩みましたが、この旅行で普段出来ない事や、彼女の希望を叶えてあげたかったので、親御さんには内緒で、彼女と二人で好きなだけ温泉に入る事に決めました。とはいっても親御さんに怒られたら…、発作がおきたら…と不安でいっぱい、楽しんでる彼女を横目に私の心は落ち着きません。

一緒にお湯につかりながら、「普段は見守られてお風呂に入っているけど、どう思っているの？」と聞いてみると、「そら嫌やで。お風呂は好きやけど待って貰ってるから気を使うし、ゆっくりに入られへんしな。だから今日は気にする事なく入れるから最高や」と。彼女の本音が聞きました。普段の彼女の入浴時間は十分弱で、冬の寒い日でもお湯にゆっくりに浸かる事なく出てきます。

この二人旅を機に、「ゆっくりにお風呂に入って下さいね」と声かけをするのですが、彼女の入浴時間は、その後以前と変わることがありません (入江)

### 職員紹介



#### まつかけいじ 松川慶次

生活支援の主任を務める彼は、いつも利用者さんと同じ目線で対話をします。彼の周りには笑いが起こり、自然と人が集まります。

家具屋の末っ子として生まれ、子どもの時は自然の中を飛び回って遊んでいました。学生時代は、壁紙貼りや漬物屋のアルバイトをする傍ら、青少年のキャンプリーダーに力を注ぎました。彼の行動力と、その身の軽さは今も健在で、ドアの修理から町内会回りまで、決めた

ことは即実行。主任でありながら、ユニオンの「最高の用務員」とも言われます。

家ではテレビにビール、旅先では現地の人と杯を交わすという三十三歳。「若いものには負けられません」。

#### まきのまこと 牧野雅子

短期自立生活体験の担当を経て、今年度はグループホームで利用者さんの生活を支えました。物腰柔らかい独特の話し方で、利用者さんとの距離を縮めます。

赦しいしつけと数々の習い事をこなしてきた子ども時代。その反動のように社会へ飛び出し自分を模索した学生時代。食の追求からマングローブの植樹まで、興味に向かって突き進み、そこで出会った多くの人から影響を受けました。

人の人生に関わるユニオンの仕事に責任と重みを感じると話す彼女。この秋、一旦仕事を離れて結婚し、来春には母となります。

(内田・野々村)

### 編集後記

ワークスユニオンのグループホームにはいろいろな方が住み、障害の程度も、生活パターンも様々です。先日は、駅の売店でお金も払わずにスポーツ新聞を立ち読みしている方がいたり、わざわざ遠回りして地下鉄を乗り、小旅行を毎日している方もいます。深夜にジュースを買いに、スリッパで歩いている姿などもよく見かけます。

利用者の皆さんは、混沌とした世間の中で社会のルールを知り、その中から自分らしく生きる術を得ています。これは、地域で生きていく中で身に付けてこられたものだと思います。

職員は、利用者の部屋に入る時はとても気を使います。一人の人の生きてこられた人生がその部屋の中にある、軽く踏み入れるわけにはいかないのです。

利用者管理せず、施設化にはしない、でも一人一人の生活をしっかり守っていきたい。このすれすれのラインが一番難しく感じる今日この頃です。(荒木)